

赤彩浅鉢について

—— 孺恋村今井東平遺跡の資料から ——

松 島 榮 二 ・ 山 口 逸 弘

はじめに

1. 赤彩浅鉢の出土

2. 赤彩浅鉢1・2の観察

3. 赤彩浅鉢の時期

4. 所見

おわりに

—— 論文要旨 ——

本稿は、群馬県吾妻郡孺恋村今井東平遺跡出土資料の紹介である。今井東平遺跡は、縄文時代中期～後期の大遺跡であり、5年間にわたる発掘調査資料は膨大なものになる。未発表資料ではあるが、数回に分け、代表的な資料を紹介することにより、遺跡の意義を深めたい。

今回は、紹介の2回目にあたり、3区斜面に形成された捨て場遺構出土の赤色塗彩浅鉢形土器2個体を取り上げる。この2個体の時期を縄文時代中期前半期にあたる、勝坂1式古段階と捉え、彩色された浅鉢の位置付けを考え、集落内外において他者への視線を意識した容器として捉えた。

キーワード

対象時代 縄文時代

対象地域 群馬県

研究対象 縄文時代中期浅鉢形土器

はじめに

本稿は、孺恋村今井東平遺跡出土の縄文時代中期に比定される赤色塗彩浅鉢形土器（以下赤彩浅鉢）2点を紹介し、その資料的価値を考えることを目的とする。

縄文土器の研究は、従来深鉢形土器（以下深鉢）が主たる観察対象となり、その時間的位置や型式論的な位置付け等様々な研究課題が提起されており、今後も深鉢を主とする編年論や型式論研究は様々な資料と研究を経て蓄積していくものである。

この煮沸道具としての深鉢に対極するものとして、一方の浅鉢形土器（以下浅鉢）はその器形から、用途を供献用・盛り付け道具とした研究視点が注意されてきている。浅鉢には文様が少なく、無文のものも少なからずあり、型式論的な対象としては詳細な判断が下せないためであろう。

近年、浅鉢に関し様々な研究が取り組まれている。中でも、佐藤雅一氏と中山真治氏の研究は、従来の浅鉢研究に対して、新たな研究方向を示唆するものであり、さらなる、研究の深化が期待されている¹⁾。

群馬県内でも、中期浅鉢の出土は多く、特徴的な資料が知られている。それらに対して、幾つかの分析・研究は見受けられるが、型式論を前提とする深鉢研究に比して、器形あるいは出土状態が優先される傾向にある。さらに、県内の中期土器は既に膨大な量に達しており、深鉢に対する研究も覚束ない状況であり²⁾、浅鉢にまでなかなか分析の視点が及ばない現状である。

加えて、中期浅鉢に限らず、浅鉢という器種には彩色が施される例が多々見られる傾向がある。中期に関しては、かなりの比率で彩色が重なっていたと考えても過言ではない状況である。この浅鉢と彩色の関係に関しても、県内では積極的な分析はなく、深鉢文様との対比など研究課題は山積している状況である。

今回紹介する今井東平遺跡出土の浅鉢2個体は、赤彩が施され、良好な残存状態を示している。資料紹介を経ることにより、今後の浅鉢研究あるいは赤彩に関する分析に参考資料を提供することと考え、本稿を起すこととなった。

本稿で扱う、今井東平遺跡出土の縄文時代資料に関しては、先に「孺恋村今井東平遺跡の紹介—1区縄文時代中期土器資料を主に—」（松島榮治他2004）として、当事業団『研究紀要』22に既にその一部を紹介している³⁾。それ故、遺跡の地理的環境や調査の概要は、今回の紹介では触れ得ないが、前稿を参照していただきたい。

また、本資料である赤彩浅鉢2個体は孺恋郷土資料館に所蔵されている。赤色塗彩浅鉢として展示されているが、本稿では他の彩色浅鉢との関連から赤彩浅鉢という名称を使用した。

1. 赤彩浅鉢の出土

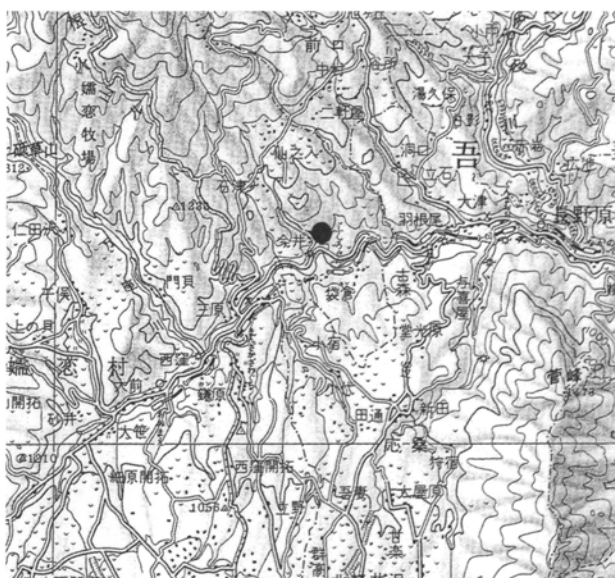
浅鉢2個体は平成10年度調査において、3区斜面捨て場遺構で出土している。

斜面捨て場遺構は、遺跡の北斜面に形成された遺物包含層からなる。東西幅17m以上、包含層厚は最大で1.5mに達する大規模なもので、多量の土器・石器、獣骨片が出土しており、斜面に廃棄された当時の生活道具等が具体化した姿である。また、炭化物や灰も遺物類とブロック状に確認されており、一括廃棄の箇所も数箇所みることができた。

調査では、包含層の上層（A面）と下層（B面）に分別が果たされ、上層では中期後半から後期初頭の資料が、下層では中期前半の土器が主体的に出土している。厳密な層位区分ではないが、下層より中期後半にあたる資料が見られないことから、斜面廃棄行為は巨視的な時間軸に沿った廃棄と考えられる。

本稿で扱う、浅鉢2個体は下層でも下位部分で出土例であり、調査時より層位的に中期前半の所産として捉えられていた。この下層出土土器群の様相は、勝坂式及び阿玉台Ⅰa式からⅡ式古段階が主体であり、今井東平遺跡で得られている集落跡では、集落形成期にもあたる時期である。調査範囲は面的ではないため、遺跡全容は把握できないが、周辺に中期前半段階の集落跡の存在は予測されよう。斜面捨て場遺構の中で、下層に充実する当該期の資料の存在は、濃密な前半期段階の集落形成を示唆する。残念ながら、本稿では、それらの資料を掲載できないが、将来的には紹介を果たしたい。

浅鉢2個体の出土状態としては、両者とも北斜面上位において、1個体としてまとまった破片出土であり、個体として廃棄された例と考えられる。周辺には中期前半の深鉢・浅鉢片が伴出しているが、五領ヶ台式～阿玉台



1図 今井東平遺跡位置図
国土地理院20万分の1「長野」使用

Ⅱ式という時間幅も見られ、共時性を示唆する出土状況ではない。残念ながら、明瞭かつ確実な共伴資料とはいえない。

しかしながら、両者とも鮮やかな赤彩が施されており、他の出土深鉢と比して対照的な在り方を示していた。中期前半段階の出土土器群の中にあっても異彩を放つ存在感といえよう⁴⁾。

2. 赤彩浅鉢1・2の観察(2・3図)

出土した浅鉢は、赤彩を考慮し、国立歴史民俗博物館永嶋正春先生へ赤色顔料の分析と個体の復元を依頼している。その際の分析では、顔料はパイプ状ベンガラであり、極めて良好な残存状態を示すと分析されている。氏の分析は、その概略を後述するが、詳細は正式報告に掲載すべきものと考え、そのため、本稿では顔料に関してはベンガラ朱として紹介を進めたい⁵⁾。

尚、両個体とも、赤彩以外に漆付着箇所や黒色塗彩痕跡の抽出・観察に努めたが、明瞭な黒色箇所は見られず、燻し等による器面黒色化が認められたのみである。しかし赤彩箇所と器面黒色箇所による、赤彩意匠文の描出ではなく、赤彩のみの意匠文塗布と捉えたため、実測図の表現は赤彩による意匠文を優先した。

浅鉢1(2図)：大形の浅鉢である。優品ともいえよう。口径41.6cm、底径10.8cm、高さ20.5cmを測る。平縁で、口唇部が内折し2.5cm程の無文の面を持つ。口縁部は僅かに内傾し下端が突出することにより、体部と画され、口縁部文様帯を形成する。体部は深く、緩やかに外反気味に開くが、下半に丸みを帯びる。口縁部に若干の歪みが見受けられるが、全体的に均整の取れた器形を呈する。

文様は口縁部に集中する施文浅鉢である。口唇部より垂下する小突起による口縁部区画文構成である。9区画を数え、3単位構成と窺えよう。区画形状は方形であり、器面が剥落するため、詳細な文様が把握できない区画が2区画あるが、概ね、幅広の半截竹管状工具による連続刺突文が区画内縁に施され、内部を結節沈線と半肉彫状の三叉文などで埋められる。横位の交互刺突文と結節沈線を施す区画と結節沈線による半円状の小意匠文を充てる区画、三叉文に囲まれた空白部を刺突文で埋める3区画が連続しており、区画単位文は欠損部を想定すれば、 $3a + 3(b + b')$ と思われ、変形した3単位構成と見ることができよう。施文は極めて丁寧であり、刺突文といえども、角押文に近い施文である。結節沈線は単列施文で隣合う線との間隔を違えることなく施文している。内外面とも器面は研磨されており、特に口縁部内屈部は入念な研磨が施されている。

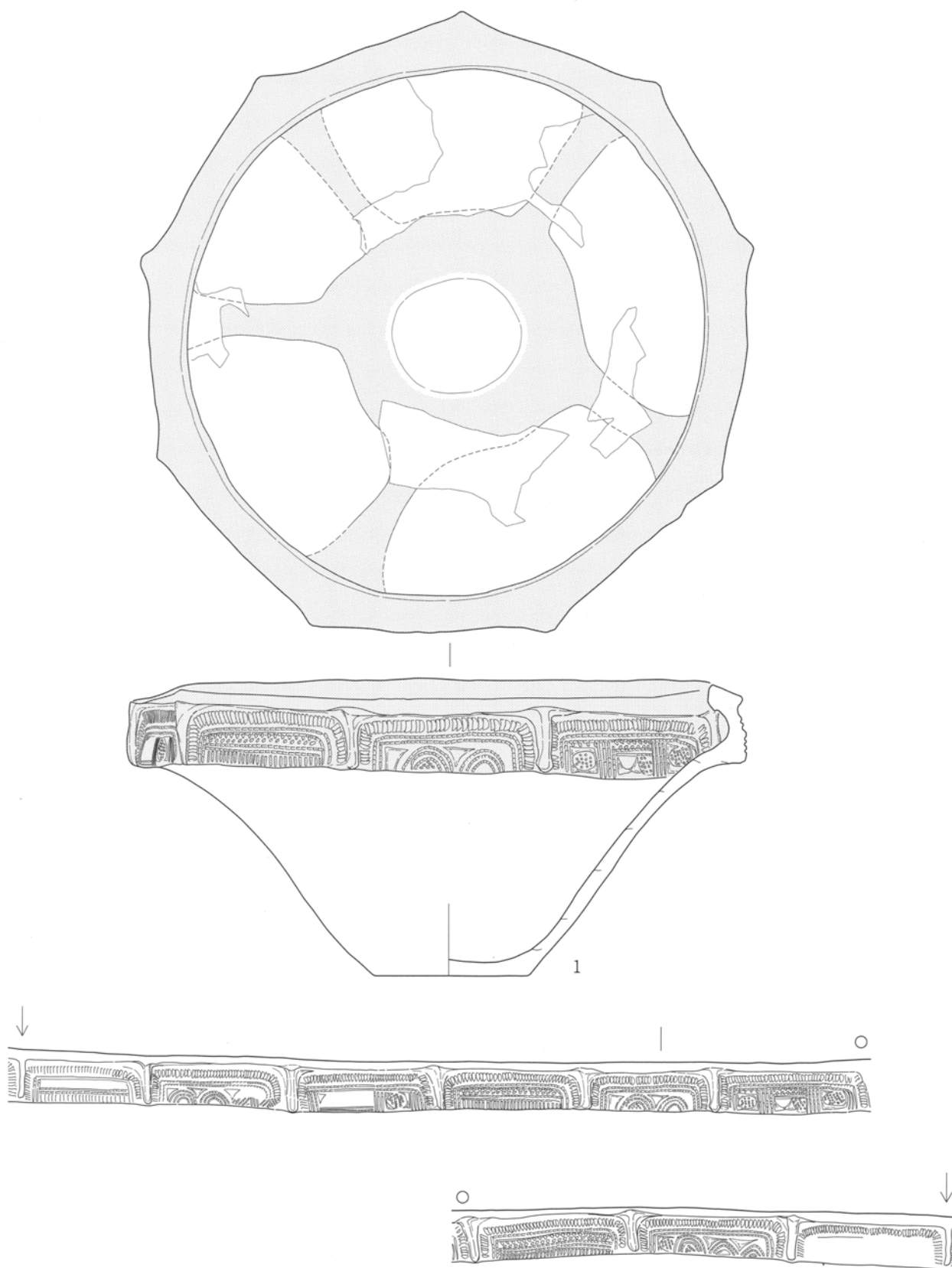
さて、赤彩箇所は口縁部内外面、体部内面である(2図上)。体部外面も詳細に観察したが、外面は口縁部に赤彩が集中するようだ。外面赤彩は、口唇部内折部分と

口縁部文様帯に施され、特に、口縁部文様に重なる特徴が見出せよう。赤彩は内面にまで及び、内折する口唇部内面には明瞭に残存する。口唇部内面の赤彩を観察すると極めて丁寧な塗布状況が窺われる。この内面口唇部赤彩は、体部内面にまで延長しており、垂下懸垂文として観察できる。体部の残存は約1/2に止まり、残念ながら全容は把握できず、赤彩の残存もやや不良であり、赤彩意匠も不明な部分が多い。おそらく、4～5単位の垂下懸垂文が配されるものと推測されよう。これは、口縁部区画文の数と合わず、赤彩文様の単位と口縁部文様の単位に差が設けられた例として注意を要しよう。また、口縁部内屈部の赤彩も重要な塗布部位であろう。おそらく、上位からの視線を意識した器形と塗布部位であり、浅鉢1の赤彩部位の中で重要な彩色箇所といえよう。入念な研磨が、内屈部の重要性を示唆する。

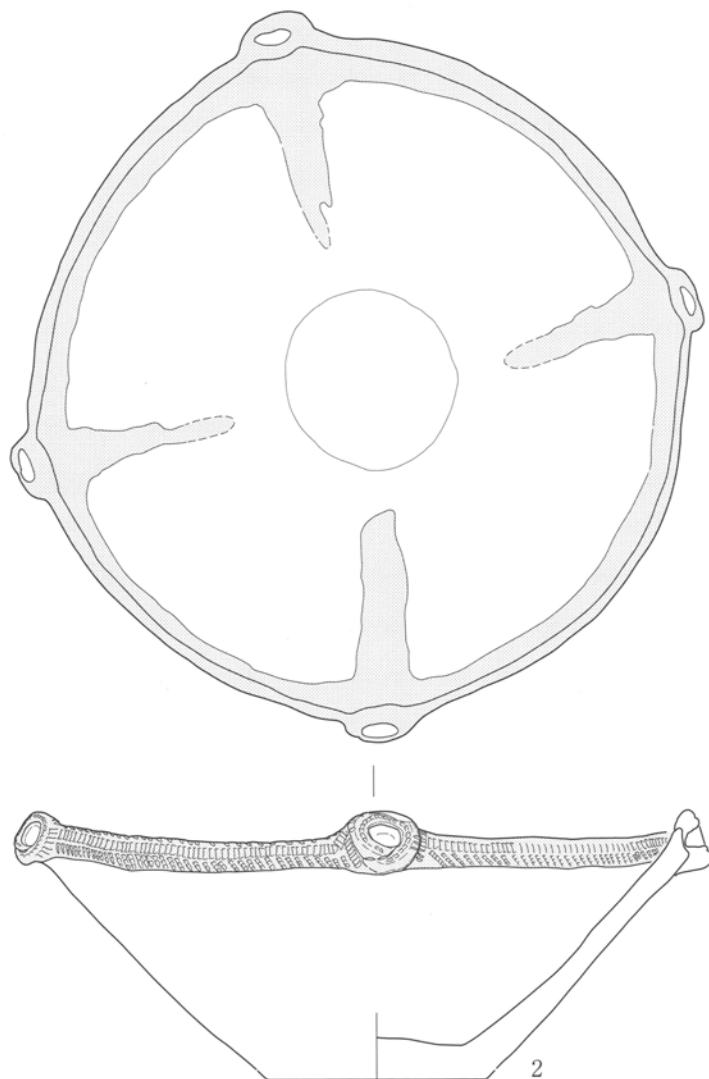
浅鉢2(3図)：やや小形の浅鉢である。底部外面が欠損しており、数値は復元であるが、概ね口径34.8cm、高さ(14.2)cm、底径(11.6)cmを測る。口縁部は幅狭で直立気味に内傾する。体部は直線的に開き、やや浅く扁平な印象を得る。口縁部文様として。円環状の小突起を4単位付す。突起の配置は正4単位ではなく、微少なずれが生じているが、4単位意識と対称配置が強く意識された突起配置と見ることができよう。口縁部文様帯は、この突起を中核とした単位で構成される。突起縁辺には浅い刻みが施され、結節沈線文が沿う。口縁部文様帯は浅鉢1と同様に下端の屈曲により画され、隆線などによる主幹線による分帯線ではない。突起による区画内は、小区画されず、幅広の半截竹管状工具による横位連続刺突文と斜位結節沈線文が充填される。浅鉢1と同様に極めて丁寧な施文で、各区画も同様な手法で充填文として埋められている。

浅鉢2も赤彩が施されている。浅鉢1に見られるような鮮やかな赤彩ではないものの、明瞭に口縁部文様帯と体部内面に認められる。外面の口縁部文様帯赤彩は主に連続刺突文や結節沈線文に残存していたが、施文間の器面にも認められ、口縁部文様帯全体に塗布が及んでいたようだ。一方体部の無文部に関しては、明瞭な赤彩痕跡は認められず、浅鉢1と同様に外面は口縁部文様帯全体に集中する傾向が看取された。内面赤彩は極めて良好に残存する。浅鉢1に比しても赤彩意匠として、容易に把握できた。口唇部端部より内面にかけて横位帯状に塗布され、突起内面を中心としてT字状に垂下する意匠が描かれる。浅鉢1と同様の垂下懸垂文であるが、突起に沿った4単位構成を示している。

このように、今井東平遺跡斜面捨て場遺構より出土した赤彩浅鉢2個体を観察した。両者とも、口縁部文様帯を持つ施文浅鉢で、赤彩を加える特徴を共通する。浅鉢



2図 赤彩浅鉢1 (1/4, 展開図は1/6) トーンは赤彩部分



3図 赤彩浅鉢 2 (1/4) トーンは赤彩部分

は特に、深鉢に比して施文要素が少なく、形式的な判断や時期決定に少なからず判断を迷うことが多い。今回紹介した2個体も、施文浅鉢とはいえ共伴資料には恵まれておらず、詳細な時期的特徴を述べるまでには至らない資料である。

しかしながら、出土層位が確実に中期前半期にかけて形成された斜面捨て場下層に限られる例からも、次節である程度の編年的な追求を試みてみたい。

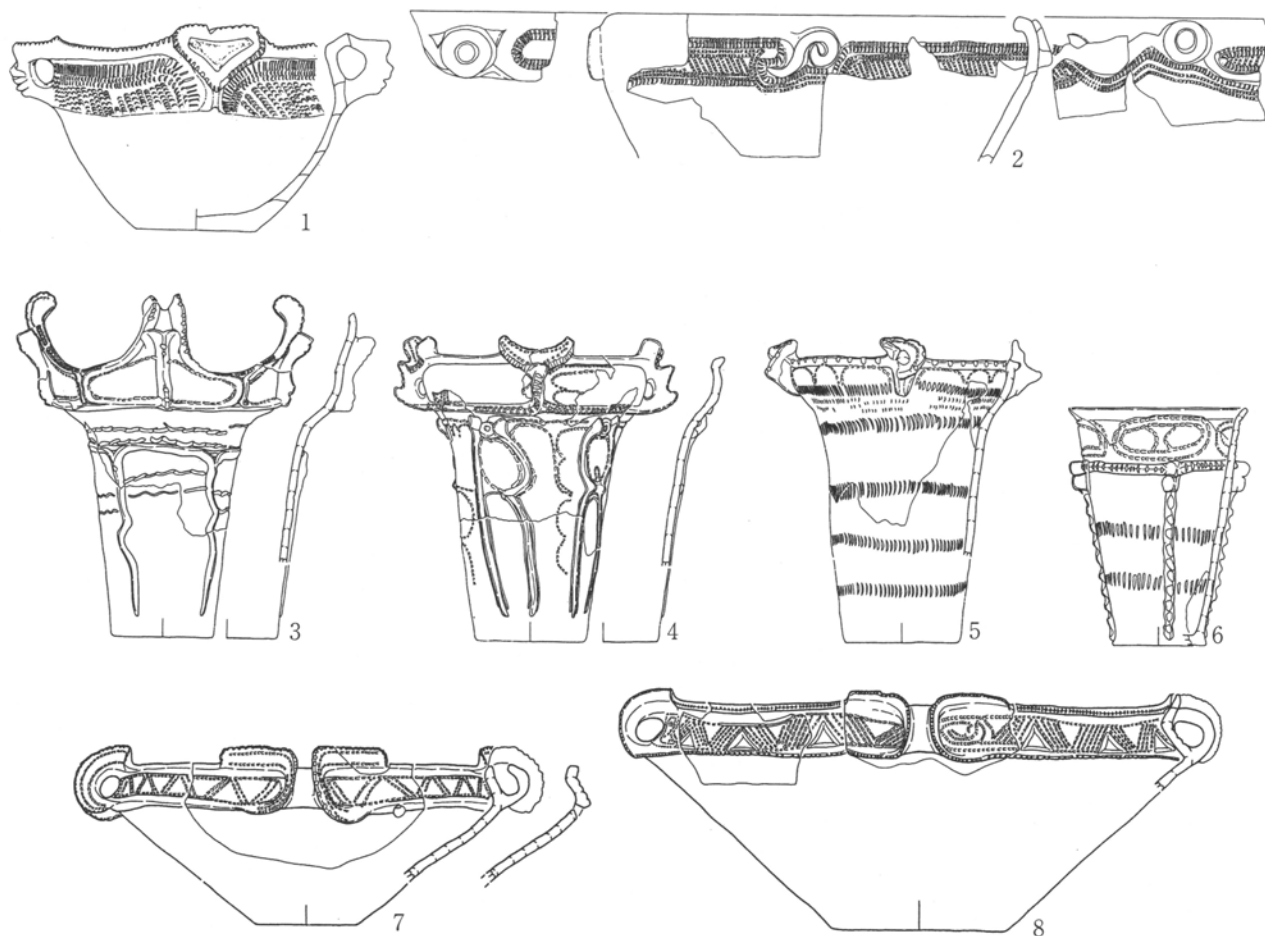
3. 赤彩浅鉢の時期

県内で赤彩された中期浅鉢の著名な例は、中期後半—加曽利E式段階に良好な資料が集まる。塗布方法などの変化なのか、残存率も中期後半段階の浅鉢が良好であり、かつ深鉢への塗布も行われている例もある。中期前半段階の浅鉢の多くも赤彩が施されているものと考えられる

が、若干ながら残存率が悪いのか、全容を窺う例は極めて少ない。その意味で、今回紹介する浅鉢2個体に関して、確定的ではないものの、時間幅をもった帰属し得る時期を与え、中期前半段階の良好な赤彩浅鉢として、位置付けを試みておきたい。

最初に2個体の比較をしてみよう。両者とも赤彩浅鉢であり、口縁部文様帯を有する施文浅鉢である。

大きな相違点としては、浅鉢1は口縁部文様帯内を9分割3単位構成という特徴を見せ、浅鉢2は対称性を維持した4単位構成である。さらに、浅鉢1の施文手法として半肉彫の三叉文や刺突文、結節沈線文等様々な文様要素がが充填文として駆使されているのに対し、浅鉢2は斜位結節沈線文のみが充填文として多用されている。浅鉢1が豊富な施文手法を使用するのに対し、浅鉢2は比較的簡素な印象を受ける文様要素である。また、口縁



4図 勝坂式の浅鉢(1・2)と阿玉台式(3~6)に共伴する浅鉢(7・8)

1・2 = 赤城村諏訪西遺跡 3~8 = 赤城村諏訪上遺跡371号土坑

部形態の差は著しいものがあり、突起を付す浅鉢2と平縁で強く内屈口縁を有す浅鉢1は大きな差がある。

このように、多くの相違点が見られる、浅鉢2個体であるが、筆者はほぼ同時期と考えている。理由の一つとして、充填文の差が著しいが、側線の半載竹管状工具による幅広連続刺突文が両者に共通するからである。さらに充填文としての結節沈線文も、両者は単独施文で極めて丁寧な施文である。単なる文様要素の共通性のみで、両者の同時性を窺うのは危険かもしれないが、中期前半段階の隆線側線の共通性はある程度の時期判別に効果があると考えているからである。無論、主幹文様の共通性や共伴資料の在り方が最優先されるべきではあるが、捨て場遺構出土であり、厳密な共伴資料に恵まれない、浅鉢という事情を考慮すると、文様要素側線による判断も有効と考えた。

さらに、2個体とも、赤彩部位と内面意匠が極めて類似しており、共通性をもった赤彩行為と考えた。赤彩意匠も時期を判断する材料ではないが、両個体の共通項目として注意し、親近性を指摘したい。

次に、両個体の具体的な時期を模索してみよう。共伴

する深鉢も無く、詳細な判断にまでは至らないが、文様要素から、勝坂1式古段階に位置付けたい。口縁部文様帯の分帯手法を見ると、口縁部屈曲線による分帯であり、阿玉台I b~II式の施文浅鉢に見る横位隆線貼付による分帯ではない。また、浅鉢1は方形状区画を連続する口縁部文様帯構成であり、楕円状区画が主体の阿玉台式の浅鉢には属さないと考えた。次に側線の幅広連続刺突文に注目すると、これらは勝坂式に見る文様であり、浅鉢1で充填される三叉文も勝坂式の文様特徴である。さらに、単列施文の結節沈線は阿玉台I a式やI b式にみる例ではあるが、本例の場合、厳密な押し引き文というより、丁寧な押引施文—角押文に近い結節沈線である。このことから、勝坂1式古段階(貉沢式・新道式古)に比定しておきたい。また、深鉢・浅鉢と器種を違えても、施文浅鉢には深鉢口縁部文様と同様の文様を充てる傾向がある。このような例から判断しても、本資料を勝坂式の浅鉢と位置付けられよう。

厳密な共伴ではないが、捨て場遺構においては、勝坂1式及び阿玉台I a式・I b式の深鉢が量的にも充実しており、浅鉢1・2とも同様の段階と判断しても良さそ

うである。

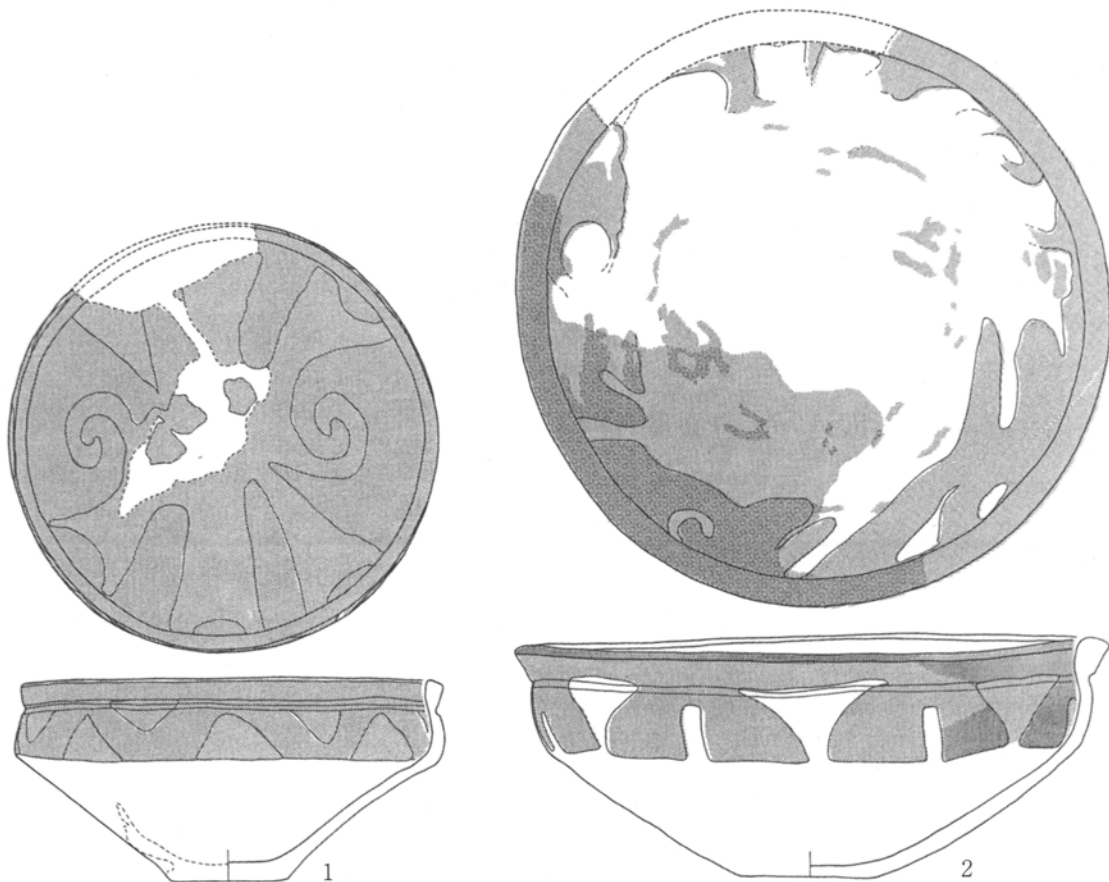
さて、この段階の施文浅鉢の類例は阿玉台式に比定される例が多く、本例のように勝坂1式に近い浅鉢は比較的少ない。例えば、赤城村（現渋川市）諏訪西遺跡に勝坂式の浅鉢2個体が報告されているが（小野1986）、包含層出土であり、これも厳密な時間軸を与えられない（4図1・2）。ただ、隆帯等による口縁部分帯線が見られず、連続刺突文を文様要素としており、今井東平例との共通性がある。赤彩は判然としないが器面全体が丁寧に研磨され、何らかの彩色は行われていたものと推測できる。器形も阿玉台式の浅鉢とは違い内湾気味の口縁部を呈する。次に、阿玉台I b式の浅鉢共伴例として、諏訪西遺跡に隣接する三原田諏訪上遺跡例（日沖他2005）を挙げ、今井東平遺跡浅鉢の口縁部文様と比較してみよう。諏訪上337号土坑では数個体の阿玉台I b式の深鉢（4図3～6）と破片とはいえ、4点の浅鉢口縁部破片が伴出している。7と8に見る施文浅鉢は、口縁部分帯が既に隆帯で画され、今井東平例とは区画手法に差がある。また、7・8とも側線に単列の結節沈線が施され、充填文様にも斜位結節沈線が交互に埋められることから、阿玉台I b式の浅鉢と判断できよう。ただ、8に見るように、口縁部文様帯には三叉文が刻まれており、阿玉台式の浅鉢

においても、三叉文のような勝坂式の文様が混在する様相が理解できる。これは、今井東平遺跡浅鉢1の口縁部文様帯にある、幅広連続刺突文と結節沈線の共存施文に見るように、異系統文様の相互交換と見ることができ、浅鉢口縁部文様帯における興味深い施文方法である⁶⁾。

その他に当段階に比定される注意すべき浅鉢としては、吉岡町沼南遺跡319号坑（松村1999）や安中市中野谷地区遺跡群砂押遺跡D—36（井上2004）では、赤彩が施された異系統の個体が出土している。体部施文が特徴の浅鉢であるが、機会を改めて分析を試みたい浅鉢である⁷⁾。

4. 所見

前節で述べたように、今井東平遺跡出土の赤彩浅鉢2個体は勝坂1式古段階と捉えた。県内でも、この段階の浅鉢に赤彩が施される例は極めて少なく、そのことから、この2個体の資料的価値は高いものと考えられる。県内の赤彩浅鉢の著名な例は高崎情報団地遺跡が最近の資料であり、その他にも新田町（現太田市）下田遺跡（小宮1994）などが知られるが、多くが中期後半の資料である。関東地方の中期浅鉢を概観しても、赤彩資料は中期後半に集中し、残存度を考慮したとしても、塗布方法の変化が中期前半期から後半期に変化が予想されよう。5



5図 高崎情報団地遺跡彩色浅鉢

図に高崎流通団地遺跡例（角田2002）を挙げてみたが、内外面への彩色意匠が具体化した良好な資料である。時期は中期後半―加曽利E式期に比定されるものと思われるが、1は内面の渦巻き状意匠が明瞭に描かれる。2の内面も何等かの彩色意匠が施されている。両個体とも黒色化した漆も塗布されており、鮮やかな色調差が印象的である⁸⁾。このような内面赤彩意匠は、中期後半の浅鉢にしばしば見られる。多くの場合、浅鉢外面の口縁部より彩色がなされ、内面意匠へと連携する塗彩方法である。この塗彩方法は、後期・晩期にかけての浅鉢や鉢に見られる手法であるが、中期浅鉢においても積極的な彩色方法として用いられていたようだ。

筆者もかつて、赤城山西麓域の中期浅鉢を考える際に、赤彩浅鉢に関して、以下のように観察項目を挙げた経緯がある⁹⁾。

- a. 口縁部施文浅鉢の主幹文様に合致した塗布例
- b. 文様とは合致せず、赤彩独自の文様を塗布する例
- c. 無文浅鉢全体を塗布する例。口縁部に限られる例や内面内稜線にまで及ぶものもある。
- d. 無文浅鉢に赤彩独自の文様を塗布する例

としたが、その際には、内面の赤色塗彩や彩色意匠に関しては、特に大きな注意を払わなかった反省点がある。しかしながら、高崎流通団地遺跡例は内面に、彩色文様が施されており、上記4項目に新たに加わる彩色方法として追加される重要な彩色手法として位置付けたい。同時に、今回紹介に及んだ嬌恋村今井東平遺跡赤彩浅鉢も同様の塗彩部位であり、口縁部から、体部内面へと連携する赤彩意匠は、少なくとも中期前半段階より継承された塗布方法と捉えられよう。

このように、口縁部外面から体部内面に彩色施文する技法は、中期浅鉢に普遍的に存在する例として、位置付けられる可能性がある。

赤彩文様が当時の「中期土器文様」社会でどのような立場だったのか考えてみよう。漆に混和されたベンガラによる赤色塗料―赤彩を塗布するのは、焼成後と考えられている。

土器焼成から彩色行為という一連の工程の中で、彫塑文様製作者と赤彩文様彩色者が同一人物ならば、土器文様や器形の特徴を反映した彩色行為を行うものと思われ、焼成後に彩色という工程は当時の土器彩色行為で重要なタイミングを要する作業と思われる。故に、意匠文塗布という彩色作業は合理性が求められ、彫塑文様製作者が彩色行為を行ったとも考えられよう。さらに 彫塑文様製作者が彩色者と仮定すれば、器形製作の際から、赤彩文様を塗布する行為を前提にした、「土器作り」が行われていたことになる。故に、浅鉢1の口縁部内屈部への入念な研磨行為と赤彩行為が行われたものとも考えられよう。また、浅鉢2の体部内面の4単位赤彩意匠も制作前

から、意図した意匠であり、それ故の4単位浅鉢と見ることもできる。

しかしながら一方、浅鉢1の体部内面の赤彩意匠単位は4・5単位であり、3単位である外面口縁部区画単位との差は、歴然としている¹⁰⁾。内面彩色時に口縁部区画単位を無視した彩色行為であり、彫塑文様製作者と赤彩彩色者の違いも想定できよう。また、本資料では確認できなかったが、外面隆帯文様とは違う赤彩意匠を外面に描く個体も時に見受けられることから、彩色者が彫塑文様を無視して新たな彩色意匠文を重ねる例はあるようだ。また、彫塑文様施文環境と彩色文様施文環境の差も考慮しなければならないだろう。少なくとも、彫塑文様完成後焼成に至る間は乾燥期間が挟まれ、彩色文様を施す際の様々な環境は変化しているものと想定できよう。彫塑文様製作者と彩色文様製作者の差については、更に類例を集めて分析を深めなければならないだろう。大きな検討課題の一つである。

また、彩色土器は時間が経つに従い、退色する欠点がある。退色した際には廃棄する行為も想定されるが、さらに加色する行為も容易に想定できる。このことが、粘土を彫塑する土器文様とは大きな差があり、彫塑土器文様とは別種の文様として、彩色文様を捉えることができよう。土器を補修する作業は、大きな破損ではない限り通常行われていた作業であり、赤彩追加塗布行為は、土器に刻まれた彫塑文様とは別次元で行われた彩文行為とみることができよう。残念ながら、今井東平遺跡浅鉢2個体を初め、我々に遺されている赤彩文様に、その追加赤彩塗彩行為を観察することはできない。しかしながら、今後、赤彩浅鉢に接する際にはあり得る施文手法として、観察を重ねなければならないだろう¹¹⁾。

このように我々が、赤彩文様に対する観察と様々な注意を払う事によって、将来的に、赤彩文様が集落間・地域間に差を認められれば、従来の土器文様との比較分析を踏まえて、彩色土器文様論へも発展するように思える。従来の彫塑文様を主体としてきた、深鉢編年と絡めて、浅鉢文様や浅鉢彩色文様をも視野にいれるべき資料蓄積に至っている研究段階かもしれない。

次に縄文時代中期における、土器群の中で器種組成の意味での浅鉢の役割を考えてみよう。中期集落を調査すると圧倒的多数の深鉢形土器片を得ることができる。その中で、やや客体的な存在とはいえ、一定量の出土量を安定する浅鉢の存在は、中期集落内で各種深鉢と同等の組成的な位置を占めていたものと考えている。すなわち供献―盛りつけといった、加熱・煮沸を伴わない容器としての位置付けが、現状の浅鉢形土器に関する用途と考えである。最近の研究では、彩色土器や小型土器、さらに精緻な文様を施す深鉢に対しても「威信財」としての役割を想定する傾向が見られる。集落間の土器の移動を考え

る限り、浅鉢や小型器種は、対集落間の「贈答品」を内容物とする容器として、深鉢よりも優先されたものと考えられる。

また、赤彩浅鉢は集落間をつなぐ「威信財」以外にも、集落内の「緩衝材」ともなり得る容器とも捉えられよう。すなわち赤彩された部位を見ると、今回紹介に及んだ浅鉢2個体をはじめ多くの赤彩浅鉢が口縁部彩色に及んでいる。浅鉢という器形のもっとも径の大きな部位である口縁部に赤彩し、他者に対して印象を強くする部位への彩色行為と考えられる。さらに内面の赤彩は、盛り付け・供献に際して内容物を彩る効果のみならず、これも相手—他者に見えやすい部位への彩色と見做すことができよう。中期集落内には異系統の土器群が存在するように、様々な価値観や地域感が混在する集落様相と想定している。異系統の土器文様相互の交換といった、具体的な要素も見られるなか、赤彩浅鉢の役割は、集落内において見せる相手を意識した容器として位置付けておきたい。

無論、集落内のみならず、集落間の「威信財」あるいは「緩衝材」としても、赤彩浅鉢は重要な容器であったことが前提ではある。

おわりに

このように、姫恋村今井東平遺跡出土の赤彩浅鉢の紹介を通して、浅鉢2個体の時期を捉えてみた。同時に中期浅鉢に施される赤彩—彩色の在り方を考えてみた。

時期は確定的ではないが、2個体とも中期前半期—勝坂1式古段階と捉えた。両個体とも類例資料に乏しく、口縁部区画形状や側線の種類で判断をしたため、判然としないが、捨て場遺構同一層位で出土する深鉢が、阿玉台Ⅰa～Ⅱ式・勝坂1式に偏る傾向があり、ある程度の時間幅で判断させていただいた。

勝坂1式古段階で浅鉢を共伴する例は意外に少なく、類例として、若干新段階である阿玉台Ⅰb式段階の共伴例を挙げたが、当該段階においては、阿玉台式の浅鉢が優勢であり、勝坂式に帰属する浅鉢は極めて少ない。群馬県という地域性なのか、今後検証の必要な課題であるが、今井東平遺跡の赤彩浅鉢2個体が、阿玉台式に属し得ない特徴を考えると、姫恋村の位置する地理的な環境も大きく影響するかもしれない。

次に、浅鉢に施される赤彩に関して考えを巡らせた。本来ならば、赤色顔料の成分分析などを踏まえて、論を進めるべきであったが、今回は、赤彩部位の在り方から、中期浅鉢の集落内外での役割を想定してみた。

彩色を施した土器文様は、相手を意識した文様であり、土器製作者あるいは彩色者が、土器の役割と立場、さらに相手を意識した、重層化した施文彩色が行われた作品とみることができよう。赤彩は他者の視線を意識した施文要素であり、特に口縁部外面と体部内面への赤彩は、

他者に対して浅鉢を置く角度、あるいは手に持つ角度が意識化された結果の彩色行為と考えてみた。

以上のように、今井東平遺跡出土の赤彩浅鉢2個体の資料紹介と若干の所見を加えてみたが、縄文時代中期浅鉢の本質を述べるには至っていない。深鉢とは明らかに用途差があり、器面全面を研磨し彩色する器種として、中期集落内での浅鉢の立場を明らかにしなければならないだろう。さらに、「威信財」あるいは「贈答品」として広域に伝播する器種としても注目されており、集落内の浅鉢が在地のものかあるいは搬入品や異系統の浅鉢なのかを個々に検証しなければならないだろう。先にも述べたように、浅鉢の殆どが文様要素が少なく、詳細な時期決定にも難儀する土器である。

加えて、本稿でも若干触れ得たが、赤彩意匠—彩色意匠の在り方も、通常の深鉢土器文様との格差を想起させるものである。殆どが焼成後の彩色行為であり、このことから、土器文様—彫塑文様に対する彩色文様の大きな差を考えることはできないだろうか。おそらく、彩色文様にも規則性が存在するものと思われ、彩色文様の変化も重要な観察項目である。彩色文様の変遷や彩色方法の変化で、浅鉢自体の変遷を追うことも可能ではないか。全ての浅鉢の赤彩意匠を把握することは難しいが、より観察を深めて、浅鉢の資料化を重ねるべきであろう。

今回の紹介では、斜面捨て場遺構の同一層より出土した遺物も全ての資料化が果たせず、掲載に至らなかった。次回では必ず充実した土器群を提示したい。斜面包含層ともいえる捨て場遺構になぜ、特別詠えともいえるべき赤彩された浅鉢が廃棄されたのか。該期集落内での浅鉢の位置付けは、出土状態からも類推されなければならない。伴出する他の中期前半資料の図化を果たし、捨て場遺構の性格や浅鉢2個体との関係にも言及するべきであろう。本稿では、浅鉢2個体という資料紹介という掲載方法を取らざるを得なかったが、機会が与えられたならば、今井東平遺跡捨て場遺構の実像に迫る分析を心がけたい。

また、赤色顔料分析に関しては、永嶋正春先生の詳細な分析結果を踏まえて、稿をあらためて掲載したい。パイプ状ベンガラの在り方と在地のベンガラの関係など極めて重要な分析である。

本資料2個体の赤彩に関しては、小林 正氏の詳細な観察を経て図化を試みたが、氏の観察を十二分に反映した資料化に至らなかった。この点に関しても、今後小林氏の赤彩・漆塗布に関わる分析を含めた視点で、本資料の位置付けをお願いしたい。

尚、巻頭カラーの撮影は、事業団佐藤元彦主査の手を煩わせた。記して感謝したい。

この他に今回の紹介にあたり、下記の方々には大変お

世話になった。文末で恐縮であるが、記して感謝したい。
江原 英 小川卓也 鈴木徳雄 関智賀子 高橋清文
富田孝彦 日沖剛史 福田貫之

註

- 1) 佐藤雅一 2001 「信濃川中流域の浅鉢形土器について—縄文時代中期浅鉢形土器の基礎的研究—」『新潟考古』12号新潟県考古学会
中山真治 2005 「縄文時代中期の彩色された浅鉢についての覚え書き—関東地方西南部の中期資料を中心に—」『東京考古』23東京考古談話会
- 2) 近年、中期集落跡の調査例、報告例は極めて充実している。その都度、土器に対する分析は担当者各自が精力的に試みられているが、充実した資料を基に、県内全域を概観する作業の必要性を痛感する。
- 3) 松島榮治・福田貫之・山口逸弘 2004 「縄恋村今井東平遺跡の紹介—1区縄文時代中期土器資料を主に—」『研究紀要』22財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団（以下群埋文）
- 4) 赤彩された土器は、今回紹介する浅鉢2個体以外にも、破片資料を主とするが一定量の出土を見ている。これらの資料も次回資料化を果たしたい。
- 5) 永嶋氏の分析は、本遺跡の他の赤彩土器に関しても論究されているため、該当する土器の資料化が果たせた段階で、氏の分析も併せて考えを進めたい。また、縄恋村や隣接する長野原町は、ベンガラの産地とも言われており、赤彩された考古資料の出土が知られる地域である。最近では、「横壁中村遺跡(2)」(群埋文2005)で赤彩された土器がまとまって報告されている。
- 6) この他に、三原田諏訪上遺跡では233号土坑において、勝坂式の深鉢と小型浅鉢が出土している。浅鉢は幅広連続刺突文を側線とし、結節沈線を充填文としており、今井東平例と類似する文様要素である。
- 7) 沼南遺跡例は体部縄文施文の浅鉢である。口縁部文様帯を半肉彫手法で描く例が多いが、北陸的な色彩なのか検討の余地が多い異系統の浅鉢である。その他には白井大宮遺跡Ⅱ(根岸他2002)や道訓前遺跡(長谷川2001)でも異系統の浅鉢の出土を見る。
- 8) 両個体とも赤彩を主とするとはいえ、数種類の顔料が使用されているようだ。この場合漆塗りのみの場合でも黒色化する例もあり、注意を要しよう。また、内面意匠をみると、特に2の「人体状意匠」にも近い彩色文様が印象的であり、明らかに深鉢文様との差が認められよう。
- 9) 山口逸弘 「浅鉢形土器との対話—赤城山西麓の縄文時代中期中葉資料から—」『赤城村歴史資料館紀要』第2集赤城村教育委員会
- 10) 一方で奇数相互の単位文であるため、関係性は深いとみる判断もある。その場合は、口縁部区画単位数と内面彩色意匠文の単位数に関連性を求めるべきである。
- 11) 赤彩追加塗布行為は、現状の資料では確認できていない。残存度の良い個体で、元の彩色意匠に重なる新たな彩色意匠が観察できれば、その存在は確定的になる。

引用・参考文献

- 井上慎也 2004 『中野谷地区遺跡群2』安中市教育委員会
小野和之 1986 『中畦・諏訪西遺跡』群埋文
小林修他 2005 『横野地区遺跡群Ⅳ三原田諏訪上遺跡Ⅲ—縄文時代—中期編』赤城村教育委員会
小松繁 2000 「5. 漆塗土器」『栗島台遺跡—銚子市栗島台遺跡1973・75の発掘調査—』千葉県銚子市教育委員会
小宮豪・小宮俊久 1994 『下田遺跡』新田町教育委員会
佐藤雅一 2001 「信濃川中流域の浅鉢形土器について—縄文時代中期浅鉢形土器の基礎的研究—」『新潟考古』12号新潟県考古学会
末木健 1979 「縄文時代中期浅鉢形土器研究序論」『奈和』17号奈和同人会
角田真也 2002 『高崎情報団地Ⅱ遺跡第1分冊《縄文時代編》』高崎市教育委員会
中山真治 2005 「縄文時代中期の彩色された浅鉢についての覚え書き—関東地方西南部の中期資料を中心に—」『東京考古』23東京考古談話会
根岸仁他 2002 『白井大宮遺跡Ⅱ』群埋文
長谷川福次他 2001 『道訓前遺跡』北橋村教育委員会
藤巻幸雄他 2005 『横壁中村遺跡(2)』群埋文
細野高伯他 1996 『鼻毛石中山遺跡』宮城村教育委員会
松島榮治他 2004 「縄恋村今井東平遺跡の紹介—1区縄文時代中期土器資料を主に—」『研究紀要』22群埋文
松村和男 1999 『沼南遺跡』群埋文